

# 琉球大学学術リポジトリ

## 不良胚移植後妊娠の周産期・新生児予後

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学 公開日: 2018-04-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Akamine, Kozue, 赤嶺, こずえ メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/40905">http://hdl.handle.net/20.500.12000/40905</a>

(別紙様式第7号)

## 論文審査結果の要旨

報告番号	課程博 * 第 号 論文博	氏名	赤嶺 こずえ
論文審査委員	審査日	平成 30年 3月 6日	
	主査教授	中西 浩一	
	副査教授	斎藤 誠一	
	副査教授	前田 士郎	
(論文題目)			
A comparative study of obstetric and neonatal outcomes of live births between poor- and good-quality embryo transfers (不良胚移植後妊娠の周産期・新生児予後)			
(論文審査結果の要旨)			
1. 研究の背景と目的			
<p>不妊症患者に対する体外受精の治療成績は向上してきたが、加齢や卵巣機能低下などによる難治性不妊症患者に対しての成績は、いまだ低い状態である。このような症例の多くは、排卵誘発剤に対しての反応が極端に悪いため、1回の採卵で得られる卵や受精卵が少なく、加えて良好な胚が1個も得られないことも少なくない。貴重な受精卵が形態学的に不良胚(不良胚)のみであった場合、移植後の周産期予後に関して不安を訴える患者も多く、移植すべきか苦慮することがある。形態学的に良好な胚(良好胚)を移植した場合に比べると、不良胚を移植した場合の妊娠率が低いことは、これまで多くの先行研究で報告されているが、妊娠成立時の周産期・新生児予後に関しては、いまだ不明な点が多い。そこで当院で移植を施行し妊娠転帰の詳細が得られた症例を解析し、不良胚移植による妊娠は、周産期・新生児予後にどのような影響を及ぼすのか明らかにすることを目的に本研究が行われた。</p>			
2. 研究内容			
<p>2008年1月から2014年12月の期間、当院産婦人科で体外受精・胚移植後、生児獲得に至った症例のうち、単胎妊娠で妊娠経過の詳細が得られた症例(良好胚群80例、不良胚群25例)を対象とし、両群間の周産期・新生児予後を比較した。胚の良・不良に関しては、初期胚(受精3日目の胚)ではVeck分類Grade2以上、胚盤胞(受精5日目の胚)ではGardner分類3BB以上を良好胚とし、それ以外を不良胚と定義した。患者背景では、不良胚群で胚盤胞移植の割合が低い傾向にあったが、年齢、BMI、子宮手術の有無、早産歴、不妊期間、移植時子宮内膜厚など、その他の患者背景に有意差はなかった。良好胚群と不良胚群の周産期・新生児予後を比較すると、出生体重、出生週数、分娩方法、前期破水の頻度、早産率、低出生体重率、妊娠高血圧症候群、妊娠糖尿病、絨毛膜羊膜炎、前置胎盤、常位胎盤早期剥離、巨大児(≥4000g)、臍帯動脈血pH&lt;7.20の頻度、奇形率の項目でいずれも2群間に有意差はなく、周産期・新生児予後は同等であった。以上より、不良胚移植後の妊娠は、周産期・新生児予後に不利益をもたらさないことを示した。</p>			
3. 研究成果の意義と学術的水準			
<p>不良胚移植後妊娠の周産期・新生児予後を評価した研究は少なく、本研究結果は臨床的に重要であり、不良胚移植に不安を訴える患者にとって、治療法を選択する上で有用な情報をもたらすものと考えられる。本邦において多施設の多数症例での検討はなく、施設ごとに調査を行い同じ結果であることを確認し、本邦におけるコンセンサスを形成していくという点でも、本論文は価値があると考えられる。以上より、本論文が琉球大学大学院医学研究科の博士論文としての要件を十分に満たしており、学位授与に値するものと判断した。</p>			

- 備考 1 用紙の規格は、A4とし縦にして左横書きとすること。  
 2 要旨は800字～1200字以内にまとめること。  
 3 \*印は記入しないこと。